

方東樹の漢學批判について

濱 口 富 士 雄

一 問題の所在

方東樹(1772~1851)の清朝漢學に對する批判は、主として『漢學商兌』において展開された。その漢學批判は、從來理學派の單なる主觀的な反撥としてのみ扱われ、考證の學がもつ動もすれば學の爲の學として傾斜しがちな非社會的傾向に對し、經世的關心に基づく鋭い洞察がその批判に内在していたことは等閑に付されてきた如くである。

そこで先ずこれまでの方東樹に關する諸見解をかいつまんで概觀することにより、問題點の所在を明らかにし、小論における論點を定めてみたい。ただ、方東樹が桐城文派に屬すことから、漢學派の文論と文學上の對立が存した點も、彼の批判の一要因であつたが、本考察では觸ることができなかった。

第一に梁啓超は、「漢學正統派が全盛の時期に奮然と立ち向つたのは、革命的な事業であつた」と極めて高く評價した。一方、胡適は、「漢學商兌は少なくとも理學末流の『樸學』に對する極めて激しい反動であると言えよう」と反動として否定的に捉えている。また、侯外廬も、「理學家の漢學商兌は、もとより當時の地主階級を代表した反動思想であつた」として、時代の趨勢に逆流する反動思想であると規定

している。

續いて、これらの論の立論の根柢を考察してみる。梁啓超の場合には、自身が清末公羊學派の實踐者として漢學批判をその活動の一環として行つてきた經驗に即し、その基盤とする思想的立場こそ違え、漢學考證派に始めてやや體系的な批判をなし得た方東樹を、ただ果敢に立ち向つたという事柄にのみ注目して積極的に支持したようである。これに對し、胡適は清朝漢學における訓詁考證の方法論が優れて近代の科學的歸納法に合致したものであると認定する立場から、そのような合理的な學問に反撥するのは盲目的な反動にすぎないと看做すことになつたのである。さらに侯外廬は、史的唯物論における思想史研究の立場から、かなり圖式的に唯心論の側にある理學に屬する方東樹の漢學批判は、時代に逆流し、しかも地主階級なる支配者の利益を代辯する反動思想である、と位置づけざるをえなかつた。

以上、少しまとまつた形で方東樹の思想を論じたものを簡単に検討したが、これらの見解はいずれも皮錫瑞の『經學歷史』以來の、江藩の『漢學師承記』に反撥した理學派の對抗措置である、とした論定の域を出ないまま、各々自己の思想的立場に則つて評價したものである。すなわち方東樹が朱子學的な名教擁護なる側面から清朝の考證學

に對して批判を展開した事象のみが注重されただけであつた。しかしその漢學批判の底流には、次第に白蓮教を始めとする國內の混迷や列國の將來という内憂外患の影が色濃くなつてきて、清朝天朝體制が紊亂に瀕しつつあつた現實社會の中で、かような狀況に對處しようとする經世への志向が強く脈打つていたのである。この經世的立場に沿つて、現實から乖離していた清朝の漢學、いわゆる考證學を批判しようとしていた側面は殆ど捨象されていたようである。そこで、方東樹の漢學批判における理學としての黨派的反撥を越えた、社會的な立場からの批判の在り方とその背景とを明確にして、その漢學批判の意義を考へてみる。

二 清朝漢學に對する立場

先ず、方東樹の清朝漢學に對する認識及び立場を調べてみるに、理學的な黨派の見地から名教擁護の姿勢を持って、それに反撥を加えようとしていたことは、次文から明白である。

漢學派の起源を考へてみますに、宋史が儒林と道學とに傳を分けたことを深忌したことに起り、そこから朱子が大學の格物致知に對し、窮理の説を補傳したことをひどく嫌つたのです。故に次のように言うのです。孔孟の書中では理は言わず、理を言うのは宋人の取り留めのない説で、度數名物訓詁が一貫上達の道であつて、學者はただ小學を研究しさえすれば、孔の教えを窮められるのです。決していわゆる義理の學というものはないのです、と。

(考漢學者之始、生於深忌宋史儒林道學分傳、因之痛疾朱子補大學格致傳窮理之說。故謂孔孟書中不言理、言理是宋人捕風捉影之說、而度數名物訓詁、皆是一貫上達之道、學者祇講小學、便盡孔

子之道。竝無所謂義理之學) 卷中之上、20⁽⁵⁾

宋學が道學として、從來の儒學から恰かも獨立し新たなる道統を形成確立したかの如き點に對して、漢學考證派がこれを深く忌避することになった。そこから、道學の中心概念である「窮理」「理」を攻撃の主要對象に据え、それらが全く無根據の思惟の產物とし、ただ訓詁小學にのみ孔孟の教えが存して、いわゆる義理の學は存在しないと見、宋學を否定するのが漢學派の基本的な認識である。方東樹は、かように漢學派の立場を理解した。この漢學派の旗幟の樹立のもとで、理學いわゆる宋學に對し、その存在をも左右せんとするが如き激越な挑戦が加えられたことを、方東樹は己れが理學派に在るといふ意識下から感情的とも言いうる反撥を懷き、さらには獨善にも近い形で、程朱の學こそが直ちに孔子に結合する儒學の道統を有ち、飽くまでも程朱理學こそが孔孟以來の儒學のオーソドキシイであると表明する。そこで『書林揚輝』の序卷、すなわち『漢學商兌』の第三序とも見るべきものの中で、次のように言う、

私は常々讀書しますが異説は好みません。若い時分廣く諸家の説を研究しましたが、ただ朱子の説のみ納得できませんでした。その言葉は、どれも人の心の眞理が備わり、孔子以來の聖賢と全く變らないようでした。……故に後人が著作して朱子と事を構えたものを見ると、腹立たしくなり、人の性はどうしてこのように不明なのかと思ひのです。(余平生觀書、不喜異説。少時亦嘗泛濫百家、惟於朱子之言有獨契。覺其言言當於人心無毫髮不合、直與孔曾思孟無二……故見後人著書凡與朱子爲難者、輒恚恨、以爲人性何以若是其蔽也)

このように極めて主觀的な批判の在り方は、清朝の漢學が程朱理學

を否定し去ることの餘りに急な状況に對する危機意識が然らしめたものである。しかしながら、方東樹はそれらを等し並みに無差別に批判したのではなく、漢學考證派の各々の傾向や系統を十分に把握した上で展開した。すなわち、

ただ顧炎武、黃宗羲の諸君は、實學を重視しましたが、専ら漢學を標榜したことはありません。専ら漢學を標榜したのは惠棟に始まり、それでも理を論ずるのは嚴禁しませんでした。理を論ずるのは嚴禁したのは戴震に始まり、以後、ドグマとして祖述され、邪道の説が横行したのです。(但顧黃諸君、雖崇尚實學、尙未專標漢幟。專標漢幟、則自惠氏始、惠氏雖標漢幟、尙未厲禁言理。厲禁言理、則自戴氏始、自是宗旨祖述、邪說大肆) 卷上、26

方東樹は、清朝の漢學の流れを三傾向に類別して検討した。初期の顧炎武、黃宗羲に對する口吻においては、決して強い反撥の意は込められていず、「實學」それ自體は、いわゆる漢學とは別の範疇に屬するものとしていようである。従つて方東樹の批判の中心は、それ以下の二つの流である。漢學の旗幟を高く掲げた吳派の惠氏と、宋學的な理の概念を斷乎として否定した皖派の戴氏とに在った。特に戴震が程朱の形而上學としての理を排撃した點を、以後「邪道の説が横行した」とまで言い切る。これは方東樹が戴震の次の如き思惟の内容を洞察しえなかつたことに由來する。すなわち、程朱における理が「天から受得し、心に具有する(得於天而具於心)⁽⁶⁾」とされる明證不可能の概念であつたために、宋以來の歷代の各天朝體制の中で、支配者側がそれを極めて恣意的に解釋運用し、民衆を束縛する思想的な控制力としてその統治に利用した。さらに程朱學もそのような民衆を苦痛に陥れる統治者に支配のイデオロギーを提供し、加擔してきたという歴史

的背景に立脚した上で、「古の聖人は、民の情欲を體認し遂げさせるの理を得たと考えた。しかし今は自分の勝手な臆見を、私意から出たのではなく、理であるとし、かように臆見で人を殺す(古聖人以體民之情、遂民之欲、爲得理。今以己之意見不出於私爲理、是以意見殺人)⁽⁷⁾」と言ひ、程朱的な理から情欲——人間の解放を目指したのである。そこで方東樹は、

もし理を問題にしないで、民の情欲をすべて體認し遂げさせますの理を得たとするならば、これは大亂の道であります。(若不同理而於民之情欲、一切體之遂之、是爲得理、此大亂之道也) 卷中之上、22

と反論したが、これは名教論の立場に固執したものである。しかし梁啓超に據れば、當時戴震の信奉者にあつても、彼の『字義疏證』を願慮注目する者が鮮い時に、それが理學において大いなる脅威と見抜き反駁した方東樹の見識は逆説的な意味あいで、かなり高いものがあつた。

また窮理が、聖賢の學を經書や注・疏をふまえて實證的に考據歸納し、その成果に立ち現實世界に働き掛けようとする漢學派の標識である實事求是とは程遠く、自己の内面にのみ沈潛し、勢い經書から離間して、心の本體に直接觸れるべく儒教の枠組を逸脱し、心學や禪にも入り込むような傾向を齎すものであるとの漢學派からの指摘に對しては、方東樹は次の如く反論する。

朱子はもとより、事物そのものに即すことにおいて理を窮める、と言ひました。そもそも事物に即して理を窮めることこそ、實事求是ではないでしょうか。(朱子固曰、在即物而窮理。夫非即物窮理、實事求是乎) 卷之上、49

このように窮理は、漢學の宗旨である實事求是そのものであると強辯し、彼らの理學に對する非難に對處しようとした。

さて以上見てきた如く、方東樹の清朝漢學に對する姿勢は終始學派的な對抗意識で貫通されていたようであるが、しかしその一方では、考證の學それ自體に就いて、その成果及び有効性を積極的に首肯するのである。これは方東樹が桐城文派に屬し、しかも姚鼐の高弟である事實を考えれば自明のことであろう。すなわち、桐城派、特に姚鼐はその口號として、義理・考證・文章の三位一體を高唱していたのである。すなわち、方東樹は、

義理を重んずる者は、經典や訓詁のことを斷じて忽にしてはなりません。(主義理者、斷無有舍經廢訓詁之事) 卷中之上、11

義理・考證・文章は本來一體のもので、調和すれば統一がとれ、分離すれば偏頗です。……しかし結局義理を中心とし、考證・文章はそれを明確にさせようとするためのものです。(夫義理考證文章本是一事。合之則一貫、離之則偏蔽。……畢竟以義理爲長、考證文章皆爲欲明義理也) 卷中之上、51

と、考證をも重視する點を表明する。ただこう述べても、その重點は義理に偏在していることは言を俟たないのである。とまれこのように考證に對する肯定的な姿勢があったことから、當然、方東樹自身がある程度の水準を持って訓詁音韻の學に通曉することになった。この事から、方東樹に對し低評價しか與えていない章炳麟も「東樹もいくらか音韻訓詁に識見があるので、その漢學に對する非議は、全てがいい加減な語でもない(東樹亦略識音聲訓詁、其非議漢學、非專誣調之言)」⁽⁴⁰⁾と云って、ある程度その立場を承認せざるをえなかった。考證の學に對しかなりの理解を有したことから、漢學派の考證の實態に關

する批判の中には、その本質的な弱所を穿ち肯綮に當る指摘もあり、一方では漢學派の業績を高く評價するに吝かではなかった面もある。先ず鋭い糾弾の一例を見る。たとえば制度に關する考證にあっては、實體は一つであったはずであるにもかかわらず、それが各家の解明への考證の結果において種々の異なる様相を呈してくる状態から、これは漢學の考證における大きな問題點であるとす。このような歧路に入り込む考證について次のように言う。

漢學派の人々は、強く義理は訓詁典章制度の中に存在すると言っており、^{(元)(鶴)}考工・車制の如きは、^{(孫田)(坊)}江氏に考、^(戴)戴氏に圖があり、^(阮)阮・金・程・錢の各氏は皆車制を論じております。同じように著述して、論が人毎に異り、結局一體誰のものが定論なのでしょう、^(宗)他にも^(蔡)蔡氏の賦役、^(沈)沈氏の祿田、^(任)任・江・盛・張氏の宮室、^(黃)黃・江・任・戴氏の衣服冕弁は、各自が門を専らにして互いに斥けあっています。一體誰のが眞の定説なのでしょう。か。(按漢學諸人、堅稱義理存乎訓詁典章制度、而如考工車制、江氏有考、戴氏有圖、阮氏金氏程氏錢氏皆言車制。同時著述、言人人殊、迄不知誰爲定論。他如蔡氏賦役、沈氏祿田、任氏江氏盛氏張氏宮室、黃氏江氏任氏戴氏衣服冕弁、各自專門、亦互相駁斥、不知誰爲眞知定見) 卷下、38

さらに方東樹は、漢學諸人がその訓詁考證に際して専ら依據し、かつ特に清朝において著しい研究成果があがった小學、就中『説文』に對し、『商兌』卷中之下の25—33に互り、多方面から検討した十五謬を列挙し、過度の『説文』への依存から生起した清朝考證學派の重大なる缺陥を指摘した。これは、胡適も『戴東原的哲學』183に「方東樹が、説文を信じすぎたとして指摘した十五謬は、いずれも正しい」と

言う如く、考證學への深い造詣に由來する。

次に、清朝考證學に對する積極的な理解を方東樹が有していた側面を考察してみる。

思うに三禮は専ら制度や名物が中心となるので、これは自ら漢學家の獨擅場であります。(蓋三禮專主制度名物、此自漢學勝場)

卷下、7

小學音韻は漢學諸公のすばらしい業績で、いわばその獨擅場でありますから、どうして對抗できません。公平に論じましても實に唐宋以來空前の偉業であります。(按小學音韻是漢學諸公絕業、所謂此自是其勝場、安可與爭鋒者。平心而論、實爲唐宋以來所未有) 卷下、12

など他にも類似の語が散見する。これらの認識は、漢學家の考證方面における眞骨頂を完全に理解し、各々の領域における實力を進んで肯定したものであって、決して仕方なくそのように認めたと思ふべき性格のものではないであらう。

以上において、方東樹は程朱の理學に連るといふ學派的な立場から、漢學の旗幟を高揚した清朝考證學に對し反感を懷いたが、一方では考證の學自體には相當理解を有すといふ彼の思想の基本的構造を考察した。しかば、なぜ徹底して清朝漢學に對し批判をくり廣げるようになったのか、その批判の契機を説明することが次の問題となる。

三 漢學批判の契機

儒學が畢竟社會的實踐——經世の學である時、いわゆる漢學派と目される人々の社會的な在り方は、方東樹にとって憂慮すべき事態に思われた。なぜなら彼は、漢學派が「程朱が身を治めるのに、とかく理

法で正すと畏れ、漢儒のわずかな禮義や行動を慎まず、かなり勝手が利く方がよいとする(畏程朱檢身、動繩以理法、不若漢儒不修小節、不矜細行、得以寬便其私) 卷下、18」と、認識したからである。それは惠士奇が漢學を高唱したにもかかわらず、「經學研究は服虔・鄭玄を尊び、行動一般は程子・朱子に法る(六經尊服鄭、百行法程朱)」と楹帖に手書していたことから窺われるように、讀書人にあつてはたとえ漢學派であつても一應は行動規範を宋學に準據し、學問分野は、それとは別に漢代訓詁學に典型を求めるといふ重層性が成立していたようである。しかし次第に、研究面で宋學を排するのみならず、その底流として修身面に存していた宋學的氣風までも全面的に無視否定されてきた現實を前に、方東樹は程朱理學の危機を感得した。さらに修身から平天下、すなわち個人的修養と國家的安泰とは直線的に連續するという儒學の經世觀の下に、彼らが歴史の流れの中に生起してきた社會的窮狀に對する救濟への働き掛けに無關心であることを、一層經世的な危機と受けとめた。それ故、

漢學家は、義理の學は禪に陥つてしまふと深く憎みます……思うに學問を修めて禪に陥ることは、聖教の教への毒害であります。が、しかし大體は優れた上乘の人物なのです。(夫漢學家、既深忌疾義理之學墮禪……竊嘗謂爲學而能墮禪、此爲聖學之害、然大段已是上乘之人物) 卷中之上、53

と言う。禪に陥ることは、聖教に大害ありとそのマイナス面を危惧しつつも、却つて道德的には上乘であると個人的修養の方に價値を認め、この認識を通して、名教論的枠組を超越して、それよりも修身の延長上にある經世濟民に對し上位の價値を與えんとする強靱な經世への關心が看取できる。單なる名教としての宋學への忠誠から、社會へ

とその視野が擴大したのである。したがって、漢學派に對する批判の視角は、現實社會、延いては國家が經學研究から實際的な働き掛けを蒙るといふ經世への志向が存するか否かに置かれることになった。そこで、漢學家が考據の研究を高度に専門分化させてゆく本志に對し、方東樹は次のように言う。

もとより經義を解明するためからではなかつたのですし、また決してそれを身に反求し、社會へ還元しようとし、自他ともに經を治めることからの有益さを得、國家が經に通ずることからの致用の功を得ることを願つたものでもありません。(原末嘗爲明經起見、竝未嘗反求之身、推之人事、實欲人已均獲治經之益、國家獲通經之用也) 卷下、17

このような觀點に導かれて、方東樹は、清初における經世致用を前面に推し出して實事求是を自由な批判精神の據り所として、時代の迷茫や空疎な權威に對し積極的に働き掛けようとした漢學の祖に就いては、黨派的な固陋さを越えて肯定的に評價した。

黃震・萬斯同・顧亭林らの場合、自ら時弊を目撃し、意に激昂するところがあり、救病の論を起したのです。しかし義理の分析や議論には、雑な點や見當外れもあります。(若黃震、萬斯同、顧亭林輩、自是目擊時弊、意有激、創爲救病之論。而析義未精、言之失當) 序例

と言ひ、明末清初にかけての王學左派末流による經學の病弊や時局の混亂なる時弊を直接體驗し、救病の論を展開した點を評價した點を注目したい。この視點はさらに徹底して貫かれており、

明末の如きは心學がほしほしに振舞ひ、異説が紛糾し、實に混亂をきわめました。顧氏は心配して、それを何とかくい止めよう

としました。その心根こそ非常にすばらしい。(如明末心學縱恣、異説紛歧、誠爲惑亂。顧氏憂而欲關之。其意甚善) 卷中之上、9
と述べて、顧炎武らが漢學考證學の源流となつたことについては許容しがたい心情を懐きつつも、しかしながらその時弊に對處しようとする經世的實踐を蔽ひ盡すことはなく、その心底を實に高く評價すべきものと大いに追認することで、經世致用の主張を強く唱導したのである。したがって、方東樹は『辨道論』において「君子が發言するのは、時弊を救済するに足る場合だけです。かりにその時局の弊事がそこになければ、君子は議論しないものです(君子立言爲足以救乎時而已。苟其時之弊不在是、則君子不言)」という命題を掲げたのであり、まさに漢學に對する批判の原點は、ここに置かれていたことは明らかである。

四 經世意識に裏づけられた批判

さらに、その間の事情を考察してゆく。

思うに、これら「の訓詁典章」は解明するのは勿論よいことです。しかし、もし解明できずとも、身心・性命・國計・民生・學術の主旨に影響はないのです。(竊以此等明之固佳。即未能明、亦無關於身心性命國計民生學術之大) 卷下、38

と言つて、方東樹は訓詁考據的な事項が解明されることは、それはそれでよいのだが、しからざるも現實的な歴史のダイナミクスにおける國計民生なる天下の大勢とは別領域のものであると斥け、まさに國計民生に關することが彼の思想の價值的根源であることを表明した。この立場に沿つて漢學派に對する批判はさらに鋒端を鋭くするのであった。

漢學の諸人は、一語一字ごとに考據がありますが、ただ紙上で古人と訓詁形聲傳注の雜駁さを論争するだけです。群籍を證據に引用したり、證例が數百條あつても、それを自己の心行に反求し、民衆や國家に廣く働き掛けようにも、結局裨益するところがありません。ただ、人を混惑させて、活用できないようにさせるだけです。ですから實事求是といふものの、空虚の至りなだけです。(漢學諸人、言言有據、字字有考、只向紙上與古人爭訓詁形聲傳注駁雜、援據羣籍、證佐數百千條、反之身己心行、推之民人家國、了無益處。徒使人狂惑失守、不得所用。然則雖實事求是、而乃虛之至也) 卷中之上、18

この議論と殆んど同じものが、『書林揚輝』にも記される如く、これは方東樹の漢學に對する基本的な見解であつた。すなわち、「民人家國」にいかなる有効性もないならば、本來いかなる權威も明證性に耐えられねば眞の權威とはなり得ないとして批判する自由精神の發露であつた實事求是も、ついには現實を想定しない空虚な紙上のみの學に墮落してしまつた。この強い經世觀を背景として、漢學派の内面的な非社會的な限界を剔開し、「民人家國」における有効性の存否が、思想上の價値を決定するメルクマールである、と見た。そしてこの漢學に對する論旨は、方東樹自身は「今日、何休を祖述することを専門の學とする者がおりますが、氣まぐれな物好きの派手な振舞いにすぎません(今或有祖述何休爲專學者、則客氣好事豪學而已) 卷下、8」と言つて、全く正當に評價できなかつたところの、微言大義に象徴される旺盛な政治性を固有する今文公羊學派の論理と甚だ共通している。公羊學派は、當時の天朝體制の下で澎湃として起つてきた民族問題や對外問題の時弊に對處せんとし、かつ結果的には近代化への思

想的な準備をしたという形で、徹底的に漢學に攻勢を加えた。魏源は次のように言う。

これまで經義に通じて活用するということを取辱とした者があつたでしょうか。それは訓詁音韻を小學の全て、名物器服を三禮の全て、象數を易の全て、鳥獸草木を詩の全てなどと思つて、生涯經義を研究しても、一言も自己を裨益せず、一事も政治に具現できない者でしょう。……私も先王の道がそこにはないと言ひませんが、國家をどうするのでしょうか。(曾有以通經致用爲詬厲者乎。以詁訓音聲蔽小學、以名物器服蔽三禮、以象數蔽易、以鳥獸草木蔽詩、畢生治經、無一言益己、無一事可驗諸治者乎。……吾不謂先王之道不在是也、如國家何) 『默觚』上、學編九

訓詁考證にのみ沈潛することは、畢竟自身にとつても、社會にとつても役立たず、さらには、儒學にとつて究極的な目的であり、かつその本質とは相即不可分の概念であつた「國家」自體が、そこでは視界から脱落していることを看破し、まさに「國家」を如何することが第一義的な課題であることを主張している。また、魏源は次のように言う。

乾隆の中頃以來、海内の士大夫が漢學を興しまして、長江の南北で盛況です。……みな訓詁音韻の學を競つて治め、細かく分析しますが……天下の聰明慧知を閉じこめてすべて役立たずにしてしまひます。(自乾隆中葉後、海內士大夫興漢學、而大江南北尤盛。……爭治詁訓音聲、爪剖瓜析、……錮天下聰明智慧使盡出于無用之一途) 武進李中書先生傳

これは經世致用の面から、訓詁考證に局縮し、社會的關心から、隔離された狀況では、有爲な知的力量の可能性を無用のものにしてしまひ、實に國家的損失たることを指摘した。この漢學批判の論理は、漢學が

「民人家國」なる經世上の最終目的に對して有効性があるか否かを論じた方東樹と共有される部分である。

すなわち、當時の時代相は嘉慶以來農民起義が頻發する一方、外にあっては帝國主義的市場獲得の餘波を被り、銀の流出が甚しくて經濟的社會的な激變を表出させ、それが多くの政治的問題を惹起させていた。かような時期に、清廷權力側から文字の獄や大編纂事業などの彈壓と懷柔とをこき混ぜた巧みな學者操作があつたにせよ、時弊を傍觀し、それとは没交渉に訓詁考證の學に沈潛していたのが漢學派であつた。しかも當時の漢學には、考證學的研究の場がすでに確立した所與の存在としてあつた故、儒學本來の目的たる經世濟民への主體的な問題意識が缺如し、考證のための考證へと分化してゆき、特に道咸の學者では一層、清初の學者には普遍的であつた經世への志向は殆んど意識外にあつた。方東樹は、このような漢學の非社會性に對して、經世への覺醒した意識の下に、「民人家國」に責任を負うべき士大夫——讀書人としての痛みに満ちた自覺的反省をもつて批判を展開し、『漢學商兌』を著した。彼がしばしば弟子に語つた言を蘇惇元は次のように記録する。

士というものは、政事の場合で民衆の苦しみを救濟できないならば、著作して聖賢の道の教えをしつかり維持することで、勞せず衣食する罪を補うものです。(士不能經世濟民、著書維挽道教、或亦補不耕織而衣食之咎也) 饒衛方先生傳

以上考察してきた如く、方東樹の漢學批判の根柢には、確かに主觀的な名教論としての反撥が存在するのであるが、經世致用への眞摯なる關心が盤石の如く支えとなつて、いることも明らかになつたであらう。

五 批判の直接的な對象

方東樹は上述した如き視座に立つて、漢學の批判を行つたが、その具體的な當面の對象となつたのは、阮元及び學海堂の動向であつたことを見てゆく。従來、方東樹が『漢學商兌』を著した直接の動機は、江藩が漢學的門戸を嚴格にして漢學家の評傳を記した『漢學師承記』に在るとするのが大方の見解であつた。確かにそれは動機の一つであつたが、

江氏は漢學師承記を書き、阮氏は經解を輯刻しましたが、諸家の著述中、小學を顧みず、専ら漢儒の古訓を採らないものは殆んど収録しません。(江氏作漢學師承記、阮氏集經解、於諸家著述、凡不關小學、不純用漢儒古訓者、概不登錄) 卷上、26

と、經解に言及し、さらに江藩の書は阮元によって序を付され刊行を助せられた點から、やはり阮元の存在が大きい。方東樹は、道光四年に兩廣總督であつた阮元の幕下に聘せられ教授した。その時點で『皇清經解』の編纂の動きが學海堂にあつた事態に對し、理學の危機として大いに焦燥感をつのらせた。すなわち弟子の方宗誠は次の如く記す。

漢學商兌を著した時は、恰度阮文達公の粵東の幕府に居りました。阮元は皇清經解を編修し、多くの博學老儒が關與しておりましたので、先生はこの書を著して、その謬りを正そうとしました。(當筭漢學商兌時、實在阮文達公粵東幕府。阮元方修皇清經解、諸博學老儒皆在焉、先生獨著此書、以匡其失) 柏堂師友記、

卷二六〇

とある如く、乾嘉の考證學的經學研究の成果を集大成し、理學を完全

に排斥して漢學の偉業を誇示せんとする阮元の經解輯刻が主要動機であつたことは明らかである。それ故、方東樹は、阮元に「上阮芸臺宮保書」なる書函とともに『漢學商兌』を呈上し、彼の漢學推進に對し牽制を加えようと企てたのである。

一方、阮元が廣東に創建した學海堂も、書院本來の性格上宋學的氣風を内包しつつも、漢學を擴める役割を十分に果した。從來の書院は鄉黨的な組織を背景とし、現實的な科學登第を目的とする故、官學たる程朱學を課業内容にしていたが、學海堂の漢學を主體とする學風に廣東を中心にした書院が席捲されていった。劉伯驥『廣東書院制度沿革』458には、「道光以後は、學海堂が實學を提倡した影響を受けて、各書院は古學の一課を加えたが、重點は前者〔四書など〕にあつた」と舊態固陋なる書院が次第に漢學化されたことを敘している。このような學海堂が、阮元の漢學普遍化への據點となりつつあつたことに對し、方東樹が反撥したことは、『商兌』と殆んど同時に著作された『書林揚輝』が、學海堂における教學方針に對する不滿を直接の動機としている事實にも徴することができる。

六 方東樹のアヘン問題に對する姿勢

續いて、方東樹の漢學への姿勢を、當時、中國の天朝體制に構造的とも言える程の社會的變動を惹起し、近代化へのインパクトともなつたアヘン問題への彼の對處の在り方から考察することによつて、すなわち歴史的な現實の場で傍證してゆく。方東樹の批判は觀念的な領域で行われた譯ではなく、またその具體的な對象として意識された阮元や學海堂もそこに幾分關連してくるからである。この問題に對する方東樹の高い經世的關心を調べ、そこから漢學批判における名教擁護論

的枠組を越えた高いレベルの經世意識に、改めて溯及することが可能であろう。

乾隆末葉頃から、先進資本主義國家の市場擴大の手段の一つとしてのアヘンが次第に中國に蔓延してきた。その結果、社會は困憊すると同時に、天朝體制の經濟上の基盤となつていた銀の大量流出による經濟破綻なども生じた。このような近代化への蟬脱にともなる現實社會の動搖を、方東樹はまさに不當なるアヘンによる侵蝕が齎した國家的危機であると受けとめた。これは彼の經世への關心の強さを物語つていよう。すなわち、

かの外國はアヘンで中國を愚毒しておりますが、中國の貨財數十百萬を費耗させるのみならず、成り行き上中國民族も消滅させてしまふのです。これは天地の大變であります。また開關以來、この禍害ほどジワジワとし、それでいて苛烈なものはありませんでした。（彼外夷之以此愚毒中國也、非獨糜中國金錢數百萬而已也、其勢將使中國人類日就漸滅也。此天地之大變也。自生民以來、其禍之柔且烈、未有若此者也）勸戒食鴉片文

ここにおいて注目すべきは、アヘンが中國民族を消滅させるに至るものであると認識し得た點である。當時にあつて、士大夫としての立場を越えて、普遍的な意味で民族の自覺を持ちえたことは、前時代的な感覺を超克したものと見ることができ、これは、從來の天下意識における、觀念としての民、すなわち單なる被支配的存在としての民衆觀とは次元を異にした、民族としての認識の萌芽と思われる。このようにかなり覺醒した素地によつて、アヘンの國內への浸潤を國家のみならず民族の危機として捉えたのは、實に方東樹の漢學批判の基盤であつた「民人家國」を裨益するか否かを問う思惟と一致するもので

ある。そして、このような經世への強い關心から、論理的必然としてアヘン禁止論が導き出されてくるのである。

方東樹のアヘン問題に關する論文は三點ある。道光十八年のアヘン吸飲防止を論じた「化民正俗對」、二三年の對英強硬論をふまえた漢奸對策の「病榻罪言」、それに「勸戒食鴉片文」である。ところで『漢學商兌』は道光五年に著作されている。すると少なくともこの間十三年の時間差は、漢學批判とアヘンへの關心との間には、もはや大きな斷絶があるのではなからうかという懸念を來たすが、以下の點を勘案する時、それは時間的に連續しており、しかも同様の内的論理で貫かれていと考えられる。すなわち「化民正俗對」の出された道光十八年に、方東樹は『漢學商兌刊誤補義』を印行した。鄭福照による年譜には、

漢學商兌、書林揚解刊行後、先生はそのなお改正すべき内容を調べおき、後に讀書した時、本文に補って明確にすることができ、ものを得られれば、隨時本書の上下方にノートし、蓄積が久しく、多數になつたので、取り集めて編集した。(漢學商兌書林揚解刊行後、先生檢其中尙有宜改正者。後觀書時、有所獲可以補入本條相發明者、隨割記於本書之上下方、積久遂多、取而看輯之) 方植之先生年譜

とある如く、成書後も『漢學商兌』の補訂に力を入れている事實から、漢學批判の基本的な思维構造は、その時点で完結してしまつた譯ではなく、ずっと維持されていたのであり、實質的な意味でのこの書の成立は、この時にあつたと見るべきであらう。

まず、方東樹はアヘン問題に對する立場を次のように明らかにした。

今、内外で評議する者は、イギリスの戰禍は黃爵滋がアヘン嚴禁を奏請し、鄧廷楨・林則徐二總督が叢船を沒收したことに由來すると考えておりますが、私はいずれも違ふと思ひます。(今内外議者皆以嘆夷之禍起於黃鴻臚之奏禁鴉片、鄧林二制府之收繳叢船、吾以皆非也) 病榻罪言

と述べ、基本的には林則徐らの施策を認めて禁止論の立場に在ることを示した。ひき續きアヘン戰爭の禍根を次の如く分析した。

私から見れば、イギリスの戰禍は、近年のアヘン禁止と沒收とにはないのです。それは、(一)不心得な洋商の汚れた自瀆的商法、(二)各前總督の姑息な彌縫策、(三)内地の漢奸の貪利な賣國行爲に由り、その戰禍の根はずつと以前からあつたのです。(以予詳觀、嘆夷之禍、不在近年之禁烟繳烟也。蓋由於不肖洋商之汙濁自瀆、各前督之姑息養癰、內地姦民之貪利賣國、其蓄謀長亂久矣) 病榻罪言

方東樹は、アヘン問題が急に大きく現出したのは、林則徐らの斷乎たる禁遏策が齎した譯ではなく、その原因は遙かに溯つて、洋商の利權本位の商活動、林公以前の總督達、特に阮元の柔弱な措置、さらにアヘン密賣周邊の漢奸の三要因を析出したのである。以下個々の項について考察してゆく。

七 アヘン對策に見られる經世意識

廣東の十三公行は、朝貢貿易なる名目で許容されていた對外貿易獨占の特權を受け、さらには、國家と外國商社が直接對することはありえなかつたため、その間に公行が必然的に仲介し、國からは租稅の代收、商社からは關稅の代入を委託されて豐潤であつた。一方、雍正以來アヘン禁止が國であつた故、公行すなわち洋商は、莫大な收益の

あがるアヘンに表向き關與できなかった。そこでアヘンを解禁または弛緩させ、年々輸入量の増大していたアヘン貿易をも獨占しようとする企圖の下に、公認論が要請された。このような洋商に、學海堂を始めとする書院は發商生息銀を出して維持運用經費を捻出していた。すなわち、大久保清子『明清時代書院の研究』337に據れば、

その他十三洋行の一つである伍秉鑑(伍怡和)が學海堂の年間收息銀一六〇七兩餘りをうけとり生息しているし、又粵秀書院にも洋商が資金を融通している。

とあり、學海堂は最も有力な洋商伍怡和に密接に依存していたため、アヘンに對する立場は洋商寄りになっていった。また社會から離れて漢學に没入していた學者達には、日に日に國家民族を蝕蕪する現實のアヘン禍に對する深い分析と認識がなかった故、廣東公行の意を體して、その公認を唱ふることになった。それ故、公認論の口火を切った許乃濟について、郭廷以『中國近代史』第二冊85は『夷氛聞記』の記載に據つて、「廣州の人士は秘かに弛禁を議する者がとても多かつた。許乃濟は、ただ他人の論證を採つて公然と奏章に書き入れ、それを正式に朝廷に上呈した最初の人物であつただけです」と述べており、さらに板野正高『近代中國政治外交史』157は、次のように明らかにしている。

許乃濟の公認論は、阮元が一八二〇年に創立したカントン(廣州)の學海堂という書院にたむろする學者グループの意見を代辯したものであつた。

このような許乃濟の公認論には、アヘンの交易にはバーター制を用い、銀決済は不可とする銀大量流出に對する建議も含まれるのだが、その基本的な論據は、

結局、アヘンを吸う者は、ほとんど浮惰無志の問題にするまでもない輩であり……國內の出生は日々多く、斷じて人口減少の心配はありません。(究之食鴉片者、率皆浮惰無志不足輕重之輩……海内生齒日繁、斷無減耗戶口之虞) 道光十四年上奏文

なる點であり、これはアヘン禍を矮少化し、かつそれに苦しむ民衆には一顧だに與えない前近代的な士大夫意識による民衆輕視の非經世觀を露呈している。また、それと、方東樹のアヘンは中國民族を滅亡に追いやるものだとする深刻な認識との間の落差は大きい。まさに方東樹は、そのような現實社會から全く游離し、反社會的な發想を醸成するが如き清朝の漢學の體質を感知し批判したのである。

續いて、前總督の彌縫策について考察するが、これは直接阮元が想定されているとみて大過なかるう。なぜなら阮元は嘉慶二二―道光六年まで兩廣總督であり、その間、方東樹は嘉慶二四年に『廣東通志』編纂に招かれ、さらに道光四―六年に彼の幕府にいた故、阮元のアヘン政策の實態を如實に知見していたのである。そして、この阮元について、魏源は『道光洋艘征撫記』に、

始めは蠶船もわずか五隻で、アヘンも多くても四五千箱にすぎず、砲擊を策すこともできませんでした。總督阮元が暫くは羈縻策をとり、次第に驅逐してゆきたい、と密奏しましたため、優柔不斷さが日に日に甚しくなりました。(始蠶船尚不過五艘、其烟至多不過四五千箱、可籌火攻、而總督阮元密奏、請暫事羈縻、徐圖驅逐、于是因循日甚)

と記し、阮元がまだアヘン搬入の少い時期に逡巡して積極的攻勢に出ず、羈縻と稱してアヘン密賣を容認するが如き曖昧な中國官憲の姿勢を示したため、英國側につけ込まれたと指彈した。これに對し阮元は

どちらかというところと禁止論の立場をとっていたとの反論もあるが、それは途中からで、當初は一應清朝の總督として表面は禁止の國是を遵守するかの如くにし、その内實は黙認であった。それが一轉して嚴禁策をとるに至った経緯は、衛藤藩吉『近代中國政治史研究』100に明らかにされている。すなわち、

その際かれ「其勇」が、單なる胥吏のみならず文武の大官に至るまでが、アヘンによる賄賂を收受している事實を暴露したため、總督阮元は失察の彈劾を受ける危険に曝された。それ故、自己保身の術としてやむをえず、禁令を嚴行し、アヘン輸入取締りの不行届の責任を行商伍敦元に押しつけた。

中國の官僚機構が、例え總督であろうがすべて皇帝の恣意の下に置かれたいわゆる家産官僚制であったので、自分の任期を無事に済すため滋事紛擾にのみ氣を配っていたのが常であったことを思う時、阮元の黙認も一應は理解される。しかし、その民人家國を顧みない姑息な在り方を念頭において、方東樹は、一般には、阮元の實踐を重視する思想の反映であるとされる『論語一貫説』の「貫」は「通徹」ではなく「行事」であると考證に對し、

漢學家の經書研究を見るに、本もと實踐とは判然と別物になつておりますので、もとより平素の主張とは必ずしも對應しないようです。(是其視講經、本與躬行判而爲二、固不必與其言相應) 卷中之上、53

と批判した。すなわち、阮元の考證の學は、現實社會へ向けての經世の實踐に對する思想的な裏づけとはなっていない、それとは全く分離した學のための學であった點を、阮元が經世上の重大事の前で躊躇し默認した事實を試金石として看破し、清朝漢學の限界として批判したの

である。

次に、方東樹の漢奸についての見解をみてゆく。これはアヘン戰爭の敗退を目標し、その實態を通して漢奸對策こそが焦眉の急であり、第一義的な課題であると感じとったものである。對英アヘン戰爭にあつて、密貿易周邊に生計を得ていた漁民蛋民買辦さらには賄賂を主要収入源としていた沿海水軍などは、英側に結託して自分達の既得の收益の場を固守せんとして漢奸となつた。それ故、彼らの協力のもとに英側は清朝側の機密も殆んど察知していたと言われる。そこで方東樹は、

イギリスの強さは、砲火の威力ではなく漢奸の活躍にあるのである。砲火は壓えも逃げられもできませんが、漢奸は國中にはびこつて誅滅しようにもできません。(嘆夷之疆、不在礮火、全在漢姦。

礮火易制易避、漢姦徧在內地、根株蔓延、誅不勝誅) 病榻罪言

と言つて、英側の精鋭なる艦砲よりも、その手引きとなつて活動する漢奸が國の内部に普遍的に存在することに危惧があるとし、この漢奸に對する誅罰ではなく、吸収の成否こそが對英策の關鍵であると認識した。そして、

そもそも漢奸の眞意は、初めから現在まで、ただ經濟的な欲求だけなのです。どうして心からイギリスを愛し、國家官府及び豊かな郡邑の人々に恨を懷いておりましようか。(夫姦民之本心本計、自初至今日、不過貪財思得金錢耳。豈眞愛嘆夷哉、豈眞於國家官府及富饒郡邑居民有仇恨乎) 病榻罪言

と論じ、漢奸を全く拒絶はせず、その民族的な紐帯に信頼を寄せ、ここに漢奸を此方へ吸収しうる契機を見出した。またさらに積極的にその漢奸を一般の民衆の力量とともどもに結集して、イギリス撃退の戦

力とすべきことも主張するに至った。

今もまた當然軍民大衆に、イギリスの大船を焼打ちしたり、英人を殺傷したりの場合によって、相應の賞金や官職を與えらるゝと公示すべきです。(今亦當明示軍民人等、有能饒夷人大船者賞若干爵某官、能殺夷目者賞若干爵某官、殺散夷者計首級賞若干授某職) 病榻罪言

これは、林則徐が漢奸やそうなる可能性のある漁民や買辦などを水勇や郷勇に組織して、對英反撃に向けて成功したため、民衆の力に信頼を置いたとして高く評價される開明的施策と揆を一にするものと言えよう。

右に現われた方東樹の思惟は、民衆不在の單なる抽象的な經世の論議ではなく、具體的な民衆の實像を鋭意把握した上での覺醒した經世觀に裏づけられたものであると言える。

それは、まさに『漢學商兌』における漢學批判の底に流れていた現實への強い關心の開花した姿であったと看做せるのであり、翻つて、經學の本領たる經世致用から次第に乖離してゆき、現實社會への深い分析力もいまま不確實な認識しかもてない状態に陥落していた漢學派を批判することになった方東樹の強靱なる經世觀——勿論程朱理學派なる學派意識の存在は覆うべくもないが——その證左ともなる。

八 結 び

清朝漢學、いわゆる清朝考證學が、清初、醇正なる發展をした乾嘉、さらに専門分化した道光以後にまたがって、實事求是の學風のもとに實證學的批判を通じて、程朱理學の權威を否定した。このような動きに對し、方東樹は理學派の立場から主觀的な反撥をいだし、名教

方東樹の漢學批判について

擁護論的な漢學批判を展開したとされる。しかし、それはかような皮相なる反論にとどまらず、清朝漢學が専ら訓詁名物制度に没入し現實社會と没交渉になりがちな體質を内包していたため、儒學本來の經世致用的側面がスポイルされた點を指彈したのである。經義は、一字一語の中に存ずるとしてその文獻的解明にのみ充足することなく、さらにそれが現實の場において檢證されうるといふ、本來の「實事求是」にたち返ることを要請したのである。

このような批判を行った方東樹の思想的內實は、理學派としての枠組を超越していたのみならず、現實社會の政治的經濟的な危機狀況に對する士大夫——讀書人としての痛みに満ちた責任の自覺に支えられていた。この現實への覺醒に導びかれて、經世致用への關心は極めて強靱なものがあつた。そして方東樹の批判の直接的な契機となつたのは、純粹の考證學者とはしにくい、ともかく乾嘉の學を承けた阮元と彼を中心とした漢學推進の動向であつた。しかも彼らはその非經世的な體質から、まさに民人家國における重大問題アヘンに關して柔弱な姿勢あるいは公認論をとることになつた。一方、方東樹はその熾烈な經世意識の下に、アヘン問題にあつては、林則徐や近代化への思想上の道を拓いた今文公羊學派の魏源らと並んで嚴禁論を主張し得たのである。この點から溯つて、方東樹の漢學批判における經世致用への關心の深刻さを追認することができるのである。

したがって、方東樹の漢學批判を、ただ理學派の反動としてのみ理解し位置づけることにはやや躊躇されるところがある。方東樹の民人家國にとつて有効であるか否かを問題とした漢學批判の視角は、彼の經世濟民への關心の深さに由來するものであつた。そして、それは現實社會の動靜を適確に分析することも可能にし、今文公羊學派の如く近

代化の大きな津梁とはなりえなかつたとは言え、幾分かはその方向に進み得たものであったと評價することができると思われる。

- (注1) この點に關しては、近藤光男著「漢學師承記の文章——清朝漢學の「たち」——」人文論究第17號で、「漢學と本質的に關連があるところの文章、すなわち駢文」に對する方東樹の抵抗を明らかにされている。
- (2) 『清代學術概論』50、飲冰室專集
- (3) 『戴東原的哲學』175、人人文庫
- (4) 『中國思想通史』第五冊697
- (5) 『漢學商兌』の本論での引用は、すべて望三益齋重刊本によつた。
- (6) 『孟子字義疏證』理の條に數箇所みられる。
- (7) この引文は『漢學商兌』卷中之上22に據る。また戴震の「與某書」には「後儒以理殺人」ともある。
- (8) 『清代學術概論』31
- (9) 後の曾國藩は、唐鑑『清學案小識』の跋文として「書學案小識後」を草し、「惠定宇戴東原之流、鉤研詰訓、本河間獻王實事求是之旨、薄宋賢爲空疏。夫所謂事者、非物乎。是者、非理乎。實事求是、非即朱子所稱即物窮理者乎」と言い、この方東樹と同一の論旨を提示している。さすれば、方東樹のみの強辯ではなく、桐城派あるいは宋學派における共通の了解事項であつたのであろうか。
- (10) 『檢論』卷四25(章氏叢書所收)の「清儒」の割注。
- (11) 江藩『宋學淵源記』卷上の卷頭の文。
- (12) 李鴻翱「桐城派在社會主義社會有無作用」39(『桐城派研究論文集』安徽人民出版社)では、この文を取り上げて「據此看來、桐城派所倡導の義理、注重切合實際、與宋學的空疏迂腐、係對立的。當時是有進步意識和積極作用」と言う。

- (13) 麓保孝著「清末における嶺南の儒風」221(『近世儒學變遷史論』所收)には、阮元が廣東に學海堂を創建して以來、ここに漢宋兼采の學風が起つたと詳論されている。しかし方東樹にとっては、「ただ阮元は、清朝に於ける樸學を提唱した顯達、即ち考證學のパトロンであつたが……」という阮元の漢學的側面が、強く意識されていた。さらに、方東樹の側にとつては、「[阮]文達始不悟、晚年乃致書稱、先生[方東樹]經術文章、信今傳後」(方宗誠「儀衛先生行狀」)と記す如く、阮元の漢學堅持の姿勢は晩年になって始めて方東樹の立場を認めるとともに軟化した、と見られてゐる。
- (14) 『書林揚輝』の卷頭の文に次のようである。「首以學者願書策策堂中學徒。余慨後世著書太易、而多殆於有孔子所謂不知而作者」
- (15) 『漢學商兌』は現在二種類のものが通行している。一つは『漢學商兌刊誤補義』をもとに、方宗誠らが修訂した版で、これは本論で用いた版である。この點については、拙稿「方東樹の『漢學商兌』を繞つて」(9) 版本について(大東文化大學『漢學會誌』第15號)にいささか論及してある。
- (16) 姚鼐元「鴉片戰爭史實考」14では、阮元は清帝の「不可妄動」の硃批に従つただけであるとし、仰彌「阮文達事述」318(『中國近三百年學術思想論集』)では、この密奏には問題點があるとみて、阮元には責任がないとする。
- (17) 楊向奎「中國古代社會與古代思想——從北宋到清中葉——」487など。
- (18) 范文瀾「中國近代史」上冊31、波多野善大「アヘン戰爭における對英強硬論の意味するもの」16(『講座近代アジア思想』I所收)など。